



龍族

नागा लोक

第 8 号

南天会
平成 28 年
11 月 30 日

大改宗 60 周年記念式典

Dhamma Chakra Pravatan Din

10月11日。アンベードカル博士が 1956年、50万人の民衆と共に仏教に改宗してから60年目の記念日。

ナグプール市内はこの日を期して集結した仏教徒の晴れやかな顔で満ちていた。改宗広場に通じるまっすぐな道を足取り軽く進む人々。街頭にはブツダとアンベードカル博士の肖像が掲げられ、たくさんの仏旗が風にはためいている。出会う人々は皆笑顔向け、合掌して「ジャイブーム！」とあいさつを交わす。改宗広場に設けられた大ステージ前には、白いサリーと白シャツで正装したダンマ・セナ（法兵軍）の男女が居並び、そのまわりに夥しい人々が視線をステージ上に向けて立っている。その視線の先には臙脂色の衣を着た僧侶の一行が整列し、中央にいつも増して峻厳な面持ちでこちらを向いて立つ我らが佐々井秀嶺上人。

午前9時、約束の時間。佐々井上人の大音声マイクを通して響き渡った。「ナモータッサバガワトアラーハトサンマーサンブッダッサー！」

アンベードカル博士は、貯水池解放運動や寺院立ち入り運動などのサツティヤ・グーラハや不可触民の分離選挙を求めたガンディーとの対決に敗れ、それまでのヒンドゥー教内での社会改革運動に絶望し、1935年最初の妻ラーマバイーの死去の後、ヒンドゥー教からの決別を宣言する。以後、インド憲法起草に関わってインドのあらゆる思想、歴史、宗教を研究し、21年の歳月をかけて最終的に仏教を選んだ。

その日1956年10月14日、中央インド各地からアンベードカル博士に賛同する人々がナグプールに集結した。汽車賃も持たない人々は歩いて、馬車を駆って、路上に泊まり、あるいは同じ境涯の人々に助けられ、あらかじめ決められていた白いサリー・白シャツに身を包み、午前9時の改宗式に立ち会った。数十万人の人々が見つめる壇上にアンベードカル博士は再婚した夫人を伴い登場し、クシナ

ガラから招請したチャンドラマニ長老に三帰五戒を授かり、ブツダの像に額いたその後、仏教徒としての誓いを宣誓し会場の人々に呼びかけた。「私と共に仏教を選ぶものは起立せよ！」これに依えて参会者全員が立ち上がり、誓いの言葉を復唱した。

アンベードカル博士がヒンドゥー教からの改宗を決意した1935年、はるか極東の国に生まれた一人の日本人が、大菩薩に導かれインド仏教の大導師となつて今この場所に立つ。この光景は一体何を示唆するものなのか。

インド仏教徒は改宗記念日のことをダンマ・チャクラ・プラバルタン・ディン（法輪を転ずる日）と呼ぶ。この日、ナグプールには夥しい人々が集まるが、その姿は毅然としたものであり落ち着いた喜びに満ちていて、決して熱狂ではなく、そこには仏教徒としての使命感が見える。アンベードカル博士は改宗翌日の演説で新しく仏教徒となった人々にこう語りかけた。「仏教は人類の進歩と世界の平和に不可欠な宗教である。仏教こそ世界を救う宗教である。仏教徒となった者たちは、自分自身の解放だけでなく、自国と世界の向上のために闘うべきである。」インド仏教徒はこの言葉を胸に刻み、ブツダアンベードカル大菩薩が指し示す道を今日も歩いている。その先頭を佐々井上人は満身創痍ぼろぼろになりながらも力強く歩き続ける。（佐伯隆快）



第四次派遣隊レポート

位田龍樹

日本からインドへ飛び、長期間滞在してバンテージの身のお世話を直接させて頂く「ナゲブル滞任支援」。第四次派遣隊として 8/15-11/1 の 2 ヶ月半活動していた位田龍樹さんは、派遣隊員「I」としてフェイスブックでレポートを投稿し続けてくれました。今回は龍族のために寄せて頂いた未発表稿を掲載致します(編)

10月9日

本日から3日間、大改宗広場にて第60回大改宗式が行われます。バンテージ達は午前中早くから出発し、私たち何人かは、午後から大改宗広場へ向かいました。

例年、初日は人出は多くないらしく、

また昨晩の雨もあり、出足は鈍いとの事でした。露店なども、中にはお店を未だ組み立て中の所などあり、お国柄を感じました。しかし大改宗式が初めての私から見れば、十分な賑わいでした。目の前の人達が実際に、神妙に、必死な面持ちで、しかし嬉しそうに改宗をしていく様子は、見ている私にも何とも言えない緊張感がありました。

肅々と式が行われ、日も暮れてくる頃、今日の式は終わりました。バンテージのご様子はと言え、今日に至るまでの間、連日、大改宗式についての打ち合わせや指示確認などで、既に大分お疲れのご様子でした。しかし体調が万全とは言えない中であっても、壇上の真ん中にしっかりと座り、率先して皆を改宗、得度されて

おられました。その、自分がやるんだという気持ち、責任感に、行く側である僧侶の我々までも引つ張られるようでした。

10月10日

大改宗式の2日目です。朝から会場に向かいました。

午前中に、タイからの使節団の方々がお見えになりました。そして沢山のお袈裟や、何百食という食事を寄進して下さいました。そのごく自然にお布施する雰囲気、仏教を国教とする国、タイはこうも違うものかと、その信仰心の敬虔さに感じ入りました。

そして国によって、仏教徒の雰囲気全然違う事にも驚きました。しかし、その違いを一番感じたのはその後でした。日本から、南天会主催のツアー御一行が見えた時です。私は殆どが海外経験がなく、海外でこうして日本人を客観的に見る事も初めてでした。そこで見た日本人は、周囲に気を遣い、礼儀正しく、奥ゆかしい人々でした。

お昼頃、市内のドラゴンパレス協会主

催、大改宗60周年に因んだ世界仏教徒平和集会へ向かいました。こちらでも多くの方が来ておられました。一方の大改宗広場の、質実剛健な、逼迫感、緊張感のある感じとはまた違い、会場の雰囲気も今風で、実に華やかでした。ステージの上の方々に続いて、バンテージも説法しておられました。

大改宗広場に帰ると、あたりには水たまりが出来ていました。丁度我々のいない間に、それもあり激しく雨が降ったとの事でした。

再びバンテージも加わって、改宗、得度が行われ続けます。昨日よりも人が増え、気のせいか真剣度の具合も、それに伴って、増してきた様な気がしました。

改宗のその都度起こる、法要中の独特の緊張感と、その後の、一秒でも早く解放されたいかの様に、改宗の印となる書類を皆が取り合うように求める、必死さの様な何かが幾度も繰り返される中、夕方5時に今日は終わりました。

そのあとは特設ステージにて、法会が行われ、日本からのツアーの方もステージに上がり、代表の方がお話をされたり、素敵な女性の方が詩吟を吟じられたりしました。その後はアングリマラーの劇が行われました。演出も見事で、釈尊が現れた時には、会場は拍手喝采。演者さん達の熱の入った演技に、観客は釘付けでした。バンテージはその全てを御覧にな



られ、皆でお寺に帰った時には、夜中12時を回っておりまして。

10月11日

大改宗式も3日目。朝から、見るからにお疲れのご様子のバンテージと大改宗広場へ向かいました。

まずは特設ステージにて、法要が執り行われました。阿育王と法の勝利の日であり、また60年前にアンベードカル菩薩が約60万人を改宗したまさにその日、その時刻である9時を記念しての法要です。ステージの前には、博士の組織した平等軍がズラリと整列しており、太鼓などを打ち鳴らした、一糸乱れぬ団体行動があ



りました。バンテージの大呼する号令に、勇ましく猛る全員の息の揃った歓呼の返礼は、身震いする格好良さでした。

その後は改宗式の会場へ。日に日に数を増していく人々の改宗が、途切れることなく続きました。

お昼休憩を挟み、午後私が用で席を外し、戻ると、バンテージがステージ上で、ぐったりと体を横たえておられるではありませんか。周りのインドの方に事情を聞こうにも、ヒンディー語もままならない私には判然としません。しかしつまりはお疲れのあまり、その場で寝てしまっておいででした。おそばで様子を見ることとし。不意にパチリと目を開き、二言三言、言葉を交わして、すすめるお水をぐいと飲んだかと思うと、周囲の手を借り、また元の席へ戻り、すぐに改宗式を代わって始められました。82歳を迎え、自由のきかない足腰を引きずってまで尚進もうとするお姿は、意志の強さといっ

た言葉ではとても表現できない様な凄まじさを感じました。何がこれほどバンテージを駆り立てるのかと、思わずにはいられませんでした。

そのお姿にこそ皆が揺り動かされ、アンベードカル博士亡き後止まっていた大改宗式が、バンテージの手によってこれ程までに再興されたのだと思いました。

かつて大改宗式は、アンベードカル博士が行ったのを最後に、改宗日を記念するだけの、改宗を行わない普通の法要となってしまうていたそうです。しかし十数年前バンテージが、未だ貧困に苦しむ人を救うには改宗というものが必要であると意を決し、最初はインドラ寺の近くにある広場で独自に始めたそうです。そして3年ほど続けていると、次第にそれが知れ渡り、来る人もどんどん増え、終いには本元の大改宗広場でなぜやらないのだと、問題にまでなったそうです。そ

こで、バンテージをアンベードカル博士記念協会に迎え入れる事で、バンテージが3年間培ったやり方も取り入れ、ここ大改宗広場で行われている今のような形になったそうです。今年60周年という事で、大改宗式はずっと続けられていたものと勝手に思っていた私は、僅か十数年前に、バンテージが始め、それでいてここまでの世界的規模になっている

事に驚きました。

またそれ以外にも、今あるインド仏教の形の多くはバンテージが形づくって来たと言っても過言ではありません。

バンテージが初めてナグプールへ来たのは、アンベードカル博士が亡くなったから11年程が経った頃だったそうです。そのアンベードカル博士は、数十万人も

の人を仏教へ改宗させたものの、その後、僅か2ヶ月足らずで逝去されてしまいました。

その為、仏教徒の人々は、改宗してはみたものの、その後10年以上が過ぎても、仏教の教えとは何か、殆ど知らずにいました。また仏教徒はどの様に心掛けて日々生活をすれば良いのかも分からずにいました。そのため、バンテージが

来た当時は、全くもって改宗前と変わらぬ、荒んだ極貧の生活を送っていたそうです。

博士が改宗をする以前、1951年の国勢調査によると、仏教徒の数は約18万人とごく少数で、インド十数億の人

口からすればその存在は忘れられていたに等しいものでした。そして世間一般の

人々においても、仏教とはどういう宗教かという社会通念も広がらないまま、博士亡き後11年間、時間だけがむなしく過ぎるばかりでした。

一方で僧侶の数は、アンベードカル博士の行った大改宗式以降、少しずつ増え始めていたようです。しかし博士の後を継ぐ程の熱意や指導力のある人はおられ

なかったようです。この様な状態が仮にそのまま続いていたら、アンベードカル博士が広めようとした仏教は時間とともに風化していたかも知れません。そしてインド社会に仏教が、生きた宗教としてここまで認知される事もなく、また今の様な、仏教による人々の生活改善もあり得なかったでしょう。

そこへ単身、忽然と、バンテージが現れたのです。それは運命のいたずらとでも表現する他なく、出現したと言っているくらい、インドの人々にとって脈絡も無く、突然で、当時その重要さを、誰も理解できなかったに違いありません。

バンテージは当初、ナグプールはラスグリバーク町など各地で、信仰の中心となるべきお寺の建立を、主となり従となり、額に汗してお手伝いをしていたそうです。そしてそれと同時に、インドラ村を含め、辺り一帯の村々を廻り、一日三十軒程の家を、お勤めをして歩いておられました。家を回ると言っても、言葉もわからない、急に現れた見ず知らずの東洋人に心を許す人などおりません。当初は全く受け入れてもらえず、掘建小屋の様な家々の前に立ち、一人勝手にお勤めをしていました。しかし殺人も珍しくない、近隣のヒンズー教徒ですら恐れて足を踏み入れない、屈指の無法地帯だったインドラなどで、よそ者がその様な事

をすれば、ただで済むはずがありません。一方的に石を投げつけられたり、何か怒号を投げかけられたり、無理矢理衣を引き剥がされたり、囲まれ通せんぼをされたり、炎天下の中水一杯分けて貰えず、まるで自身不可触民の様な、激しい迫害を受け続けたそうです。また当時中国とインドは戦争をしていた為、中国人だと思われ、余計に排斥を受けたそうです。それでも尚、誰一人として頼る人も知った人も居ない中、ただ一人、雨の日も風の日も、休む事なく毎日続けました。そして2ヶ月が過ぎ、3ヶ月が過ぎる頃から少しずつ受け入れられ、家に入れてくれる方がぽつぽつと出始めたそうです。

としか言いようのない毎日を日々繰り返し、7、8年が過ぎる頃、気がつけばいつの間にか敵意も投石も止み、村々でバンテージの説法に耳を傾ける人が増えてきたそうです。その間には、バンテージは自分が何者なのか、何故遠くインドの地にあってこんな事をしているのか、との自問から、インドラ村で皆が見守る中、8日間の断食、断水の瞑想をしたのです。そして8日目の明けの明星を見たとき、自分の信念の確かさと、龍樹菩薩のお加護を実感したそうです。

また仏教徒に限らず、ヒンズー教徒、回教徒などの村であつても、極貧にあえぐ村は、最初はよく分からないままに、それが分かった後でも、誰に頼まれた訳でもないのに一様に回っていたそうです。そうしている間に、バンテージが中国人では無く、日本人であると分かって来たり、理解者も出て来始め、頼み事をされる様になったり、請われて、仏教とはどういう教えなのかを説法する様にもなってきました。しかしその間も一方で、移動に使うリクシャーという乗り物を、それごとひっくり返されたり、嫌がらせや投石などの激しい敵意は、止む事はありませんでした。

その様な中、バンテージの影響で、各村人たちの仏教に対する意識も変わりだしました。そしてインドラ村で、改宗した為使われなくなっていたヒンズー教のお寺を、仏教のお寺に建て替えようという計画が、村人自身から出てきました。ついには小さな庵のようなお堂が建ち、そこで村人たちから、どうかバンテージここに居てくれと頼まれ、それからここインドラ寺が、バンテージの活動の拠点になったそうです。

何がそれをさせたのか、聞くだに悲惨

ここ迄も、この後も、バンテージの活動は既に本等に詳しく、皆さんご存知と思います。その後の活動などもお話を伺いながら、私は、バンテージという方が、たった一人、この世に居る居ないで、近年のインドの歴史が、全く変わってしまうのではないか、という事実、今

更ながら、改めて驚愕しました。バンテージがおられなかったら、インドでこれほど仏教徒は増えていなかったでしょう。今以上に、インドは差別で苦しむ人で溢れていたでしょう。大改宗式もその例に漏れず、仏教が社会的にこれほど広く認知される事もなければ、社会に主張が出来るほどの勢力を得て、活動する事もなかったでしょう。それをただ一人、自分の事も顧みず、ひたすら自身の菩提心に問いかけ、一步一步その実行によって成し遂げてきたという事に、バンテージの不屈の精神力の凄まじさ、誰にも真似できない、奇跡的偉業の結果に、畏敬の念を思わずには居られません。この目の前で屈託なく笑っておられる、御身の存在の、その重大、重要さに、返す返すも、今更ながら、慄然とする思いでした。まず自身の行動によって、自身への信用を得、それによって僧侶への信用を得、それによって仏教というものの信用を得ていく。とは、バンテージのお言葉です。

しかしそれについて、バンテージが50年間、どれ程の、痛み、辛さ、悔しさ悲しみを覚え、尚、幾度の奮起、忍耐を要したか、私にはもはや想像もつきません。苦行と言え、これほどの苦行もないのかも知れません。

そしてそのような、一日として休む事の無い、恐ろしく地道な活動の延長に、

この改宗式もあるのです。

今あるインド仏教のここまでの興隆は、偏にバンテージのお陰と言っても過言ではないと思います。その全ては、民衆のためという思いから始まったものです。しかし、元々改宗というのは非常識の非常識であつたらしく、またそれをよく思わない人も、少なくありません。実際、インド民族党という、カースト制度を是とし、ヒンズー教を国教としようとする、インドで多数を占める党派により、州によっては改宗が禁止がされています。ここマハラシュトラ州は、バンテージがおられる事もあり、改宗が認められておりますが、国の政情によっては、いつまでこの状態が続くのかは分からない、との事です。

人で一杯の中、5時頃改宗式自体は終わり、閉会式のため特設ステージに向かいました。しかし表へ出ても、車が立ち往生する程、外の通りも人で溢れかえっておりました。閉会式も無事に済み、皆へトへトになって帰ったのは夜中11時頃でした。

お祭りの様な賑々しさの中で、バンテージの、倒れ、喉を枯らして尚、声を張り上げる後ろ姿と、改宗する人々の緊迫した面持ちに、必死な眼差し、そして新たな一步を踏み出す覚悟の固い笑顔が、強烈に脳裏に焼きつき、忘れられません。でした。

2016 年 10 月 9 日～15 日

大改宗周年記念式典参列 ナグプール・ムンバイの旅

佐伯隆快

10 月 9 日 (日)

昼前に成田を発って 9 時間、夕刻の德里に到着し大統領官邸、インド門などを見てホテルに入りました。

10 月 10 日 (月)

早朝便でナグプールへ。到着後ホテルにチェックインして少し休憩し、早速

デイクシャ・ブーミの改宗会場で導師を勤める佐々井上人のところへ参りました。車両規制でバスから降りて 1 キロ歩かなくてはなりません。2 日間でこれを 4 往復しました。

改宗式では真剣なまなざしの人々が、バンテージの五戒文に唱和し、22 の誓いを宣言していました。我々参拝団は、昼食の供養を受けた後、大改宗ストウー

パ内を見学し、一旦バスに戻って佐々井上人の住坊インドラ寺へ向かいました。インドラ寺には地方から夜行列車で駆け付けた仏教徒が本堂内や通りに張られた天幕の下で寝転んでいました。夕方のパレードに参加するため休んでいるのでした。タイから贈られたブツダの立像の御本尊を礼拝し、インドラ寺事務局長のアミット氏と会談。美味しいチャイをいただきました。

夕方からは国際仏教徒会議に参列。再び改宗広場へ向けて歩きます。広場に面して設営された大ステージでは、話が出来ないほどの大音量で仏教音楽が流れています。タイやスリランカ、台湾などからもゲストが登壇し、会議というよりも佐々井上人を称える会といった感じで挨拶や歌が披露されました。我々日本人もみんなで般若心経を唱えました。この時点で午後 8 時を回り、まだまだ行事は続くようでしたが、バンテージの心遣いで日本人はこれにて退出しました。バンテージは結局深夜までステージ上で劇などを鑑賞し、インドラ寺に戻ったのは 12 時を超えていたそうです。

10 月 11 日 (火)

いよいよ転法輪の日(ダンマチャクラプラバルタン・ディン) 改宗記念日当日です。午前 9 時の全体のお勤めに遅れないように、我々は 7 時にホテルを出発

まっすぐな道を歩いてデイクシャ・ブーミへ。意外と道は空いていて早々と改宗広場に到着。アンベードカル博士の本や T シャツ、金像などを露店で買い、改宗テントで盲目の歌手の歌を聴いてバンテージの到着を待ちました。しかし、私は全体のお勤めは改宗テントではなく大ステージで行われると思っていたので、クマールさんにお坊さんやインド人スタッフに問い合わせてもらっていましたが、佐々井バンテージはこのテントに来るからここで待っているという答え。今までの経験からどうもそれが信じられないので、8 時半になってクマールさんに大ステージへ確認に行ってもらいました。案の定クマールさんがあわてて旗を振り回し「こっちですーす！」と叫んでいます。この全体のお勤めこそ今回のメインイベント、佐々井上人がアンベードカル教会の会長、デイクシャ・ブーミのプレジデントとして行う最も重要な瞬間です。これに遅れてはここまで来た甲斐が無い！ということで、皆さんを促し、人々の間を縫って大ステージへ急ぎました。途中走ったりしてすみませんでした。が、なんとか 5 分前にステージ前の広場に到着すると、クマールさんの振るボダイジュツアーズの旗を壇上の高山龍智師が発見し、バンテージに伝えて日本人をステージ近くに誘導していただきました。しかし高山さんも時間が迫って慌て



気味、ステージ前で右往左往する日本人にバンテージの怒号が響きます。なんとか舞台の横のスペースに納まったところで、約束の時間となりました。合掌してまっすぐ前を見据え、バンテージが三帰五戒文を唱えます。その声は広大な改宗広場に集まった人々の間を抜けどこまでも広がっていくようなものすごい声でした。

お勤めが終わった後は再び改宗テントに移動し改宗式を見学。日本人も改宗の儀式に参加してみようということになり、インド人と一緒に三帰五戒22の誓いをお唱えしました。改宗証明書には改宗前のカーストを記入する欄に「Japanese Buddhist」とあります。これは日本仏教徒、インド仏教徒などと分け隔てせず、真正正銘の仏教徒となったということと解釈しております。

喧騒の改宗広場を一旦後にして、市内のレストランで昼食をいただき市内西郊のフタラ湖を訪問。湖畔にはヒンドゥーのお祭りで投げ入れられた供物や菓人形

が大量に積みあがっていました。ホテルに戻り休憩して、夕方改宗記念式典に参加しました。マハーラシュトラ州ファドナヴィス首相も出席し、厳戒態勢の中えらい人々の演説が続く壇上に、私はバンテージの計らいで一人ぼつ然と座っておりました。会場は期間中一番の人数で見渡す限りの地面を人々が覆い尽くしていました。

10月12日（水）

朝インドラ寺にお参りし、ここで佐々井上人にお布施やお土産をお渡ししようと思いましたが、すぐにナグプール駅の仏教徒見送りの炊き出し（5000食が振る舞われた）に出席されるということで、我々はインドラ寺に運んだお餅やお菓子などバスに持ち帰り、高山さん、平

野さん、大泉さんも同行してマンセルへ。途中日本人の小川法子さんが寄進された妙海山龍宮寺に参拝しました。ここも大勢の人が参拝しており、参道には沢山の露店が出ていました。

マンセルでは、高山さんの先導で遺跡を巡りました。南天鉄塔遺跡（サイト3）で龍樹菩薩鉄塔開頭のご事にならつて小法要を修行し、百蓮華咲くマンセル池、大僧院遺跡（サイト2）からはるか龍樹連峰を望みました。麓の文殊師利菩薩大寺にもどるとバンテージが到着されていました。ここでバンテージ以下皆さんの昼食の弁当を用意していると伝えると、「今回クマールさんは赤字覚悟で格安ツアーを企画しているんだから、我々の分までお世話になるわけにはいかない！」と言われ、高山さんや平野さん、

位田さんらにもそのお弁当を食べないようにと厳命されていました。毎回バンテージは運転手や現地ガイドの人の食事を非常に気にされます。バスに同乗したときなどは、必ず運転手をねぎらいます。その心遣いがあります。

ラームテクの龍樹菩薩大寺は飛行機の都合で滞在時間がわずかとなってしまいました。旅行参加者の亀井さんはここから滞在支援隊としてナグプールに残ります。名残惜しい時間を過ごし、我々南天龍宮城参拝団は一路ムンバイへ。

10月13日（木）



インド最大の都市、ムンバイ。その最南端タージマールホテルとインド門が聳えるウオーターフロントに連泊しました。世界遺産エレファンタ島見学では、巨大なシヴァ神の石像やリングが有名でしたが、実はここも仏教窟を改変して造られた様子が見え、ヒンドゥーのガイドの説明に納得いかないクマールさんの解



説もヒートアップ。穏やかならざる空気を感しました。帰りのフェリーから対岸を見ると、そこに白いドーム状の建造物と高い排気塔が見えます。それはドウルバ・リアクターというインド原子力公社の研究用原子炉で、100メガワット級の原発に匹敵し、毎年25〜30キログラムの兵器級プルトニウムを生産できる能力があると報告されています。NPTに加盟していないインドは過去に核実験を2度行いました。1974年の5月12日ブッダジャンティ（降誕会）の日に行われたインド初の核実験は、「ブッダの微笑作戦」と名付けられ、多くの仏教徒が非難声明を出しています。1998年5月、BJP（インド民族党）のバジパイ首相は、2回目の核実験をまたしてもブッダジャンティに合わせて断行し、佐々井上人はこれに抗議して首都デリーで大規模なデモ行進を行い、バジパイ首相を痛烈に非難しています。現政権のBJPモディ首相は、今月来日して安倍首

相と会談する予定で、日印の原子力協定締結が取り沙汰されています。日本が東芝の子会社ウエスティングハウス社を通じて輸出しようとしているジャイタプール原発は、アンベードカル博士の地元ともいえるラトナギリ県に位置し、住民の大規模な反対運動が行われています。つつい原発の話になってしまいました。したが、市内へ戻って昼食をとり、チャトラパティ・シヴァージー博物館を見学。タージマハルホテル近辺の通りで買い物しました。

10月14日（金）

旅行もついに最終日を迎えました。朝一番にアラビア海を望むアンベードカル博士の茶毘所チャイティヤ・ブーミに参拝しました。黄金のトルナーとアショカ王柱の先にマヒム湾横断道路の橋脚が白く輝き、海風が撫でる木立の中に薄桃色のストゥーパがひっそりと佇んでいます。1956年ナグプールでの改宗を終えた

2ヶ月後の12月6日、デリーの自宅でその遺著『ブッダとそのダンマ』に最後の校訂を入れて、アンベードカル博士はこの世を去りました。その日のうちに遺体はムンバイのラージャグリーハにある自宅へ移され、翌7日大勢の



仏教徒に見守られながら火葬されました。10月14日といえば西暦での改宗記念日当日に当たります。その午前9時きっかりにチャイティヤ・ブーミで三帰五戒文をお唱えすることが出来ました。

市内北部のサンジャイガンディー国立公園の中にあるカンヘーリー石窟群は、世界遺産アジャンターと同時期に開鑿された仏教窟で現在109窟が確認されています。森林の中に隆起した巨大な岩盤を掘削し、チャイティヤ（塔廟）窟やビ

ハーラ（僧坊）窟が並び、雨水を集める工夫や暑熱を避ける構造など見どころもたくさんありました。大都会ムンバイにひしめく人々のすぐ近くにこんな広大な森が広がり、静かなる仏教遺跡が隠れるようにして存在していることに、不思議な感覚になりました。

カンヘーリーからの帰り道、公園の出口でスラムを立ち退きになった女性たち



の座り込みの抗議デモに遭い、公園から出られなくなりました。いろんな人の説得でなんとか外国人観光客は出ることが出来ましたが、インドのかかえる複雑な事情を少し垣間見た気がします。それはまた日本も同じかもしれません。まだ街頭に出て堂々と抗議をするインド人のほうが、問題に背を向けず立ち向かっていると言えるのではないかと思います。

そんなこんなで6日間が過ぎ、デリーから帰途に就きました。我々のインドはひとまず過ぎ去りましたが、バンテージは今もあの街や村で変わらず菩薩道を前進し続けています。この旅行が皆様の歩む道の一つの道標になればありがたいと思います。ジャイ・ビーム！

ツアー参加の皆様より

バンテジの背中

大泉貴司 (龍伝)

バンテジの活動のほんの一片でも見てみたいと思い、わずか13日間でしたが、渡印し現地の様子を拝見する機会に恵まれました。

今年夏にバンテジの御尊顔を拝した時よりも健康は回復基調でなによりでした。

バンテジは大改宗式前から精力的に各会議に参加されたり、訪ねてくる方々への応対と目が回るようなお忙しさであり、「このタイミングでの訪問はまずかつたのでは」という後悔の念がもたげました。ただバンテジご本人には多忙中にもかかわらず、「私のことは気にするな。まあいろいろ見ていきなさい」とおっしゃっていただきました。

神主と天台宗の経歴のある私でしたが、改宗式に参加させていただき、文字通り「他宗からインド仏教への改宗」をさせていただき、受戒・得度、法名「龍伝」をいただきました。

実際改宗式に参加しますと、戸籍が変わるので周りの方々は真剣そのものであります。

バンテジは何時間もぶっとおしで導師を務められ、「どこからあのパワーは出てくるのか」と不思議な思いにかられました。

そして、大改宗60周年 記念式典ではバンテジの大音声の三帰依文、五戒文そして「ジャイビーム」。これは映像と現地で見るとは全然違いました。それも観衆が多いほど音量が大きくなられるのです！

あのお声は肉体的なパワーではなく、



▲長時間に亘る改宗式導師の合間に、しばし休憩をとられるバンテジ

精神力であり、衆生を済度しようとする菩薩の獅子吼なのでしょう。その迫力は現地で実際に参加しないと分かりません。ぜひご縁のある方はツアー等でご参加なさるとよいと思います。

たまたま改宗式場でバンテジの背中を支えて差し上げたり、お休みのときにマッサージをして差し上げました。今年夏より体調が回復されておられるとはいえ、疲労が重なり、「体のあちこちが痛い」とおっしゃりながらも、決して活動を止めようとしない背中を支えていると、石川啄木の「たはむれに母を背負いてそのあまり軽きに泣きて三歩あゆまず」の詩がなぜか思い出され、目頭が熱くなるのを禁じえませんでした。

今回の短い滞在中、南天会の方々のご活躍ぶりが印象的でした。高山龍智師は改宗式の壇上で「ジャイビーム」と絶叫され、休む間もなく応対されており、その迫力に圧倒されました。またその該博な仏教関連の知識や、ガイド顔負けのインドについての深いご知見に驚かされました。朝のお勤めの時の素晴らしい声明も忘れられません。

現地に止住されておられる平野龍興師には私が渡印する前にご多忙にもかかわらず細々とした連絡をバン

テジの間に入っていただき、また現地入りした後も本当に親身になって面倒を見ていただきました。どんなに感謝してもきれません。

位田龍樹様は本当に良く気配りをなさる方で、バンテジの身の回りのお世話を率先して動かれ、バンテジとの呼吸がぴったりという印象を受けました。まさに師弟の阿吽の呼吸を感じました。将来が楽しいな青年僧です。

佐伯隆快様とマンセルの遺跡に同行させていただいたおり真言密教の厳肅な儀式に接しとても感銘を受けました。皆様を引率されつつ、荷物を背負いながら写真撮影や儀式・読経までこなされて、とても忙しいのにいつもニコニコとされているお姿にまた感動いたしました。

それと印象的だったのが、ナグプールの人々の姿。治安が良い様子で、子供からお年寄りまで「ジャイビーム」とあいさつを交わします。バンテジの長年の御活動でナグプールの町はすっかり仏国土になっているようでした。「日本でも



このような挨拶ができないものか」とつ
いて考えてしまうことがたびたびありまし
た。

皆様それぞれの角度からバンテージの
背中を見ておられるでしょう。壇上で
の押しも押されぬ力強い背中、周りを叱
咤激励されるときに厳しい背中、インド
仏教徒からの期待を一身に背負う巨大な
背中。そして仏教徒に接するときの笑み
がこぼれる背中、赤ちゃんを抱えるとき
の慈父の背中。

そして誰もが感謝とともに「この背中
の持ち主を支えていきたい」と感じさせ
る背中。

私には短いながら、とても密度の濃い
13日間でした。

合掌



▲なぜか地元の新聞に写真が載りました。列一番右。



カーストよ、さらば。

仏教改宗運動60周年参加報告

曾我逸郎

『インド仏教の頂点に立つ日本人僧侶、
81歳の「菩薩道」』*週刊文春10月20日
号が、佐々井秀嶺師を3ページに亘る記
事で紹介していた。

たまたま時を同じくして、10月10日に
は国際仏教徒大会が、そして、翌11日に
はヒンドゥー教から仏教への集団改宗運
動60周年を祝う記念式典が、佐々井師の
本拠地ナグプールで開催された。師を支
援する「南天会」のツアーに加わり、私
も現地に行ってきた。会場（改宗広場
デイクシャブーミ）周辺には夥しい
数の仏教徒が集まっており、その自信に
満ちた明るさに感銘を受けた。

仏教への改宗運動は、カースト差別へ
の抵抗運動でもある。バラモン、クシャ
トリア、ヴァイシヤ、シュードラとい
う四つの身分が日本では知られている
が、そのさらに下に多くの不可触民（彼
ら自身はダリットと自称する）たちが置
かれている。今回聞いた話では、イン
ド人口の45%に上るといふ（南天会事
務局からメールを頂き、45%はダリッ
トだけではなく、山岳原住民や“Other
Backward Class”なども含んだ数字では
ないか、被抑圧階級の人口は明確につか
めない、とのこと）。一説には、インド
に侵入してきたアーリア人によって征服
された先住民ドラヴィダ人が不可触民と
されたと言われる。紀元前13世紀頃の事
だ。だとすれば、三千年を超えて続く差
別ということになる。

不可触民は、公共の水場で水を飲むこ
とも許されず、唾を吐かないよういつも
痰壺を首に下げ、足跡を残さないよう腰

から刷毛を引きずって歩かねばならな
かったそうだ。

この状況を打破するために仏教への集
団改宗を行ったのが、アンベードカル博
士である。

ガンディーより22歳年下のアンベード
カルは、1891年に不可触民として生
まれた。大変優秀だったために、教室の
外でなら授業を聞くことを許され、藩
王（マハラジャ）の支援を受けて合州国
イギリスに留学し、弁護士の資格を得て
帰国する。ダリットの教育、啓蒙に力を
注ぎ、ダリットへの水場の解放、ヒン
ドゥー寺院への立ち入り容認など、具体
的な要求で非暴力の差別撤廃運動を指導
していく。英国統治下の1937年国民
議会議員になるが、ガンディーの、差別
には反対するもののカースト制度自体は
必要とする考えとは対立した。特に、ア
ンベードカルが主張した、ダリットがダ
リット代表を選出する分離選挙には、ガ
ンジーは断食をもって抵抗し、アンベ
ードカルは妥協せざるを得なかった。

独立後、法務大臣に就任し憲法案を
起草。分離選挙は実現できなかったが、
カースト差別の禁止や、差別による不利
益を是正する措置の制度化などを盛り込
むことができた。

しかし、差別をなくせない根本原因は
ヒンドゥー教にあるとして、1956年
50万人のダリットと共にナグプールで仏



教に改宗した。その場所が、今回の式典も行われた「改宗広場」である。アンベードカルはこの二ヶ月後に病死するが、その翌年出版された『ブッダとそのダンマ』は、今もインド仏教徒の聖典になっている。

アンベードカルの死後、改宗運動は一旦下火になってしまふ。それを復活させたのが、佐々井秀嶺という破天荒な僧だ。その波瀾万丈の半生記は、『破天』（山際素男）などに詳しい。

自分に誠実な人なのだと思う。数々の問題にぶち当たり、みずから多くの問題を引き起こしてきた。若い頃自殺し損ね、高尾山で助けられ出家。鹿児島のお寺で修行してタイに移り、そこにもいられなくなつてインドに渡る。日本山妙法寺に寄宿。夢に現われた竜樹菩薩（大乘仏教八宗の祖と言われる重要な人物）の命を受けナグプールに移動。アンベードカルの取り組みを知って、仏教復興運動を開



始。仏陀成道の聖地ブツダガヤの大菩提寺の管理をヒンドゥー教徒から仏教徒に取り戻す運動や佐々井師が竜樹ゆかりと信ずる遺跡の発掘、ダリットの福祉向上や様々な祈願、相談にも応えるなど、多岐に渡る活動を展開し、インド仏教徒の篤い信望を集め、改宗の大きな潮流をつくった。

週刊文春は「日本人僧侶」と書いているが、1988年にインド国籍を取得している。日本は二重国籍を認めないそうなので、元日本人ではあつても日本人ではない。

式典会場の大群衆の中を我々日本人がぞろぞろと異動すると、合掌され「ジャ

イビーム！」と声がかかる。中には、私の手を両手でしっかりと握ってくれる人もある。同じ仏教徒が遠くからきてくれたことが嬉しくてしょうがない、という様子だ。アンベードカルの肖像画や本を売る店がたくさん並んでいたが、とても安い。一冊買ったが、背表紙の定価どおりだった。改宗儀式のテントでパスポートや財布の入ったザックを雑踏の中にしてばらく放り出していたが、心配することもなくあった。仏教徒であることは不可触民階級出身であることとほぼ同義だと思ふが、車には誇らしげに仏旗を掲げている。仏教徒になると不可触民への優遇制度が受けられなくなるが、それでも改宗する人は絶えない。

長らく差別に虐げられてきた人々に、抵抗する勇氣と団結する力、希望と自信をもたらし安んべードカルと佐々井師の功績は、極めて偉大だと実感した。

ところで、仏陀は、「人間（凡夫）が執着のま

を生み出し、自分と人とを苦しめている」と発見し、苦をつくらぬようになる方法を教えた。だとすれば、差別されている側以上に、差別している側、世の中を支配している側の人たちにこそ、仏陀の教えは学ばれるべきではないか。我々は、自分たちをものごとを冷静に計算して采配する賢い存在だと思ひなしている。しかし、「執着のまま繰り返す苦をつくる愚かな凡夫であるから氣をつけねばならない」という自己認識が広がれば、インドや日本のみならず、世界中が、もう少し穏やかな、苦の少ないものになるのではないか。どうすればそうできるのか。そんな問題意識をもらったナグプールへの旅だった。

記念式典の後には、佐々井師が竜樹（大乘仏教八宗の祖といわれる仏教史上の重要人物）ゆかりの遺跡として発掘に力を入れているマンセル南天鉄塔を訪れ、ムンバイのアンベードカルの廟や仏教遺跡などを回って帰国した。

佐々井師にお会いしたのは、今回で三度目になる。最初は、インド帰化の後、久しぶりに日本に戻られた際、東京の護国寺で20mほど離れたところから。二度目は、今年お隣の大鹿村に來られた時、夜の集まりで短い時間だったが、間近に座って親しくお話を伺った。今回は、現地インドで、大勢の僧侶や在家の人たち

に取り巻かれ、精力的に活動しておられる姿を見ることができた。

前にも書いたが、佐々井師の仏教は、私とは正反対だ。私は、あれは違う、こはおかしいと、問題点をあげつらつてばかりいる。オウム真理教事件の反作用もあるし、駒沢大批判仏教グループの松本史朗先生の本の影響も受けて、釈尊本来の教えを「仏教」から抽出しようとしてきた。ところが佐々井師は、真言密教も日蓮もテラワダもこだわりなく「ごっちゃに」している。そして、人々の中に分け入り、人々の悩みや願望の相手もして、慕われ敬われている。それに比べて、私は、仲間もおらず、本かパソコンにひとりで向かってばかりだ。佐々井師のように絶対になれない。だからこそ、懂れる。

インド旅行感想文

伝宝弘子

佐々井上人と大鹿村で出会ってからのご縁で、今回ツアーに参加させていただきました。初めてのインド旅行でしたので、本当に興味本位でただただインドの空気を吸いたくての参加でした。

しかし、ツアー同行の皆様にお会いし、

自分の信仰心を問う旅となりました。その反面、軽薄にインド旅行のワクワクさも捨てきれず、内心はしゃいでの旅でした。

ナグプールでの大改宗式典の前に行われた改宗式はとても心を打たれるものでした。参加された方々は心晴れ晴れと笑顔で、しかし真剣なまなざしでご唱和されていました。

その中に年を取られた小さなインド女性があり、一心に手を合わせて祈っておられました。その方は今までどんな人生を送ってこられたのでしょうか。人生の終盤にご自分の真の生き方を見つけたのでしょうか。その小さなインド女性に心の中で大きなエールを送りました。

大改宗式典では舞台上上り、佐々井上人の後ろに座りました。ツアー参加者皆で般若心経を唱えました。そのどちらも未熟な私にとってはなんとも恥ずかしい瞬間でした。

その上、改宗証明書までいただきました。とても宿題の多い旅行になってしまいました。

佐々井上人の体調は万全のようには見受けられませんでした。が、お忙しい中なるべく私たちのために時間を取って下さろうと、ご努力してくださいました。ナグプールの空港まで送りにいらしてくださった時には、感激いたしました。

南天鉄塔を訪ねるバスの中で話してく

ださった佐々井上人のエピソードの中で「世界人類は皆同じカーストです」の言葉の衝撃を忘れられません。

佐々井上人に出会えた奇跡に感謝しております。もちろんワクワク旅行も満喫いたしました。今、大鹿村で一生の宿題を抱えながら、朝日を拝み夕日に感謝する日々を送っております。

この旅行を企画してくださった南天会の皆様、ボダイジュツアーズのクマールさん、旅行の仲間の皆様、そして佐々井上人、本当にありがとうございました。

大改宗60周年記念

ナグプール参拝旅行に

参加して

船木正幸

10月9日、9時に成田国際空港に今回の旅のメンバー15名が集合し、11時15分に我々を乗せた飛行機は離陸して、その日の夕方にはインドのデリーに到着した。そしてバスに乗ってホテルに行く前に、デリーのインド門を見物することになった。その頃は日没をとくに過ぎていて、ライトが一斉にインド門を照らしていた。私はメンバーのうち佐伯師とクマール氏の他は初対面だったが、インド門を仰ぎ

見て共通の感動を覚え、感嘆の声を上げるようになる、いつしか心が通うように会話も滑らかになった。

明朝、日の出前にホテルをチェックアウトしバスで走り、国内線で日の出を一寸過ぎた頃にナグプールに着陸した。バスで改宗広場へ向かい、途中ホテルに寄って荷物を置いて休憩した。

改宗広場は多くの人々で混んでいた。これらの人々は、これから仏教徒に改宗する人々や既に改宗が終わった仏教徒だろう。そして対面して目が合うと合掌してお辞儀をされるので、私も同様に合掌とお辞儀で返した。人と対面して合掌し合うことなど現代の日本では考えられない。合掌するのは神仏に向かうときだけだと認識していた。インドの人々の信仰心というものが、日本のものと比較して如何に厚く深いものであるか初めて気付いた。

改宗広場の奥へ進んでテントの中に入ると改宗式や得度式が行われていた。蟬や蝶々が殻を破り生まれ変わるように、仏教徒や修行僧に変わる神聖な儀式だ。大音声ブツタン・サラナン・ガッチャーミーが心にまで響く。旅行に出発前、南天会事務局から自宅に郵送された三帰五戒文のカタカナ表記の用紙を思い出し、ポケットからその用紙を取り出し私も一緒に唱和した。

一通り終わると、我々はタイの仏教徒

から頂いた弁当を喫食して、インドラ寺に向かった。中へ入ると民衆が気怠そうに寝転んでいた。彼ら仏教徒は、国際仏教徒大会のために各地から睡眠も取らずに駆けつけたという。

ご本尊の釈迦立像を礼拝後、インドラ寺事務局長のアミット氏とチャイを頂きながら歓談、記念撮影した。夕方からは改宗広場に設営した特設大ステージにおいて国際仏教徒大会が開かれ、タイ、ス

リランカ、台湾等の代表者が挨拶や歌を披露し、日本代表は TOKI NOBUKO 氏が歌を歌い、佐伯師を先頭に般若心経を皆で唱和した。この大会は深夜まで続くので、佐々井上人が我々を気遣って 20 時頃に解き放たれてくれた。

改宗記念日の 10 月 11 日早朝にホテルを出発し、改宗広場に向かった。9 時に特設大ステージにおいて佐々井上人の大音

声「三帰五戒文」が唱えられるため、それまで我々は土産物を購入したり、テントで盲目の男性アーティストの豪快な太鼓叩きと歌に聴き惚れていた。予定どおり 9 時に佐々井上人の大音声「三帰五戒文」が唱えられ、周りの人々の大合唱が大地に響き渡った。改宗広場に集まった大勢の仏教徒の心が一つに団結した時だ。私もこの中の一人だということを自覚した。

このお勤めが終わって、テントに移動し改宗式を見学中に、佐々井上人から「日本人もこの改宗式に参加してみよ」と言われ、皆インド人と一緒に三帰五戒文と 22 の誓いを唱和した。これにより晴れて私は仏教徒になったことを改めて自覚した。その証に一枚の改宗証明書を受け、現在も大事に保管している。

午後からはフタラ湖を訪ね、夕方は改宗広場特設大ステージにおいて、改宗記念式典に参列した。この式典にはマハラシュトラ州のフアドナヴィス首相も出席していたという。

10 月 12 日朝にインドラ寺に参拝し、佐々井上人の愛弟子の高山師らとともにバスに乗り、日本人の小川法子氏が寄進した竜宮寺、文殊師利菩薩大寺、マンセ

ル池、南天鉄塔遺跡及び大僧院の順に立ち寄った。先導してくれた高山師が龍樹菩薩、マンセル仏教遺跡群、ヒンズー原理主義者などの様々な興味深い話を優しく解説してくれたことが大変印象的だった。

そして一旦文殊師利菩薩大寺に戻って、次に龍樹菩薩大寺に向かい、ここでやっと佐々井上人にお布施とお土産を渡すことができた。

バスに乗り、揺られながら弁当を食べて夕方にナグプール空港に到着した。旅行参加者の亀井氏は、滞在支援隊の一員として勤務することになるため、ここで別れた。佐々井上人から見送られ、我々はムンバイへと飛び立った。

10 月 13 日朝、我々はムンバイのインド門を見学後、フェリーに乗ってエレファンタ島へ入港した。エレファンタ石窟はポルトガル人によって遺跡が欠損されたり、破壊されたりされたが、それよりずっと太古の昔に仏教遺跡だった当該石窟が

ヒンズー教遺跡に改変されたという。私は、このような例をカンボジアの遺跡にも見たことがある。また、ペルーのインカ帝国の宮殿も征服者のスペイン人が土台の石垣だけ残し上屋を取り壊して、その土台の上にキリスト教会を建てたという。宗教の自由は、絶対に守られなければならないと思う。人は何を信じていても良いと思うが、他人に自分の信じていることを強制したり、相手の信じるものを破壊してはならないと思う。現地でこの怒りを静めた後、エレファンタ島から本土に帰港して、午後はプリンスオフヴェルズ博物館を見学した。

アンベードカル博士を先頭に 50 万人が仏教に改宗した日付が 10 月 14 日である。1956 年 12 月 6 日にアンベードカル博士が他界し、ムンバイの火葬場で荼毘に付そうとしたが、火葬場の職員がこれを拒否した。法相まで登りつめた国家の偉人がこんな目に遭うなんて、信じられないことがインドでは起きる。結局、仏教



徒が海岸に火葬場を作って博士のご遺体を翌日、火葬に付した。

博士が未だ仏教に改宗せずヒンズー教徒だった頃、不可蝕民への差別を無くそうと憲法にも差別禁止とその罰則規定を盛り込んだが、一向に差別は無くならない。熟考した結果、原因はヒンズー教にあると確信したに違いない。そしてヒンズー教の根本聖典であるマヌ法典を破り捨て、仏教に改宗した。

私は博士の仏教は、日本の鎌倉仏教といえるものではないかと思う。つまり博士の仏教とは、日本に例えろと天皇家、貴族、将軍家、大富豪等の権力者が保護した仏教の宗派ではなく、最澄が創建した比叡山延暦寺で修行し自らが仏教の教えを究め尽くした後に野に下った法然、親鸞、一遍、日蓮、栄西、道元が起こした大衆や庶民のための教えではないかと思う。そして仏陀の唱える「人をその出自で評価してはならぬ。評価すべきはその人がどんな行為を行ったかである」と



いう教えに私も博士と同様に同調する。

反対にヒンズー教徒は不可蝕民の子孫は未来永劫どんなに努力して立派な行為をしても不可蝕民であり評価も変わらない、従って国民のために献身的に奉仕した元法相のアンベードカル博士であつても出自が不可蝕民なら不可蝕民としての処遇を受けなければならないという縛りに至り、前述のような始末になった。未だにこのヒンズー教の誤った教えがインド社会に浸透しているならば、正しく修正しなければならぬ。その活動をしているのが博士の創始したインド新仏教界だと思ふ。

このような考えが私の頭の中を巡っている間に博士の茶毘所チャイティア・ブーミの参拝は終わった。

そして最後の観光となるカンヘーリ仏教石窟群を訪れた。私は時間の経つのも忘れて、すっかりこの遺跡と仏像等彫刻に魅せられ皆からはぐれてしまった。しかし、他の観光客の一群に混じって出口

の方向へ歩いて行くうちに私を待っているバスを見つけ内心ホッとした。そしてバスに揺られ飛行機に乗っているうちに時間は瞬く間に過ぎて、10月15日朝に帰国した。

実は私のインド旅行は今回、2回目である。初回は未だムンバイがボンベイと呼ばれていた1985年にエレファンタ島石窟などを見学した。そしてヒンズー教の彫刻に魅力を感じて現地のガイドが言う「仏陀はヒンズー教のヴィシュヌ神の化身」を信じていました。ところが今年8月28日に東京四ッ谷の真成院において開かれた南天会交流会に初めて参加した際、インド人のクマール氏と挨拶を交わしました。その時に私は前述した

1985年のインド旅行の感想を伝え、特に仏陀はヒンズー教の神の化身だということが印象的だったと話すクマール氏はそれは違ふとハッキリと応えた。この衝撃は31年前から続いていた私のインドのイメージを突き崩そうとした。

私は心の中で今回のインド旅行で真偽を確認しようと密かに思った。そしてその結果は、仏陀はゴータマ・シッダルタという名の覚者であり、決してヴィシュヌという神の化身ではないとハッキリした。今回の旅で出会ったインド人の中にゴータマやシッダルタという名がみられたこと

が他の何よりもそれを物語っていると思う。

また、殆どの日本人は、ガンジーは知っているがアンベードカル博士を知らない。実は私も今回の旅行に参加していなければ博士を永久に知らないでいたことになる。旅行前に南天会事務局から旅行についての連絡事項に佐々井上人絵柄の南天会バッジと冊子「社会苦に挑む南アジアの仏教」が添付され郵送されてきた。私は研究者が書いたその冊子は表現が少し難しく感じたが、全部旅行前に読んでいた。

更に大乘仏教の先駆者である龍樹菩薩の南天鉄塔にも興味があつたので、図書館で佐々井上人著・中村龍海編集「龍樹と龍猛と菩提達磨の源流」、五木寛之著「21世紀仏教への旅・インド編上」及び同書下を借りて読んでおいた。有名な作家の五木寛之氏はムンバイで佐々井上人と会って対談したという。その対談内容は作家らしく平易で簡潔に書かれていて非常に参考になった。旅行前に調べられることは出来るだけ調べていたので、楽しさも倍増した。最後にインド人のクマール氏に出会えて幸いでした。彼がいなかったらこんなに実りの多い旅は出来なかった。ありがとう！クマールさん！

シルプルより。

インド・
シルプル在住
(5)
平野文興（大頭龍興）

シルプルでは、ホテルでガソリンを売っています。

長期滞在していると、日常的に移動手段が必要になってきますので、オートバイを何とか購入しました。バジャジという電気製品なども作っている会社で、日本のカワサキとの提携で作ったという 220cc のちよつとアメリカンタイプのバイクです。そのお陰で、随分方々へ動けるようになりました。

ま、それにより、以前お伝えした牛との衝突事故も起こしましたのではあります……。

また、ぬかるみにはまってしまい転倒し、火傷をしてしまいました。足首がマフラーの下敷きになってしまったて中々抜けず、右足首のところが泥水の中で、ジュウジュウ音を立てていました。丁度くるぶしで皮が薄いところだったので、骨まで焼けるほどになってしまいました。

結局、異国で約 2 週間入院。腿からの皮膚を移植、という羽目になり、ナンディシュワルゴ夫妻に大変お世話になったこともありました。保険に入っておけば良かった、と反省しきりです。

佐々井上人からは「あんたはおつちよ

こちよいなんだから気をつけなさい」とご忠告を受け、皆様にもご心配をおかけいたしました。今では、お陰様で元どおりに歩けるようになりました。

オートバイが好きで、若い頃、自家用車と大型自動二輪の免許を持っていたのですが、書き換え忘れで（佐々井上人のご忠告の通りです、ハイ）免許失格。

再度教習所に行ったものの、中型しか乗れなくなり、仕方なく 400cc のオートバイに乗っていたことがありました。35〜36 年ぶりに、しかもインドでオートバイに乗れるという嬉しきで、つい調子に乗ってしまいました。

日本ではオートバイで気持ち良く走れるシーズンが割合短いのですが、（インドと言っても広いので北部の方は別として）この辺は、風を受けて気持ち良く走れる、いわゆるバイクシーズンがかなり長いのです。ただ、日本の道路とは違って、道がどこも整備されているわけではないので、砂利道で所々穴があったり、交通規則はあっても無いようなものだし、さらに、スピード抑制の為の凸凹のストッパーが作ってあったり、はたまた、一方通行の高速道路であっても前方から走ってきたりするので、スピードが出ると大変危険ではあります。

特に夜は、エッ！エーッ！！此処は一方通行だろう、どうして前からライトが

迫って来るんだあ！とビックリします。なお、おまわりさん達もノーヘルで二人乗りしています。

しかし、何と言っても道路の世界標準との最大の違いは、道路の所々に牛様たちがおられる、という事だろうと思います。彼らは、道路に作られているスピード抑制の為の移動式ストッパーの役割をしてくれています。車がたくさん行きかう道路に、危険を顧みず、敢然として立ち入り、時には歩き回り、時には道路中央に横たわりしてセンターラインを指し示しています。

口に警笛こそ啜えていませんが、「オイオイ、そんなにスピード出すな！いつ、人が横断してくるか分からんぞ？」と警告をしているおまわりさんの様なものです。

やはりインドには、みずからの命を危険にさらしてまでも人の為に役立とうとしている神様がおられるのです。しかも、お不動様のように怖い顔で叱りつけるようにして見ているのではなく、観音様のような優しい瞳で我等を見ているのです。牛は、インディアンポリスなのだ。と言っていた人がいました。

で、オートバイにはガソリンが必需です。小さなこの村にもガソリンスタンドが一軒だけあります。

しかしながら、店は開いていても、いつでもガソリンを入れる事ができるとは限りません。

でも、軽油はいつでも給油可能の様です。農業用のトラクターや、運搬用トラックのディーゼル車の需要にいつでも応えられるようにという為でしょう。

ところが、一般のガソリンエンジンの需要にはいつでも応えてはくれないのです。売り切れると暫く入ってこないのです。私はオートバイのガソリンが底をつきそうだったので、給油の為そのスタンドに行ったのですが、売り切れとのこと。1 週間位経って行ったのですが、未だ無い。との事、いつ入荷なのか聞いてもわからないと言う。そんなのありい！その間、タンクのガソリンは減ってくるし、気が気ではありません。そのうち入ってくるだろうと待つてましたが、結局、1 ヶ月経っても入荷なし。

どうしたら良いのか、近所のバイク屋さんに行つて聞いてみたら、ここから 30 分位の街まで行けば、スタンドがあると言う。しかしそこまで行けるほどの燃料はすでに残つてそうにないのだと言うと、「それならホテルに行けばガソリンを売っている」という。

エエ!? そうなの? ホテルでガソリン売っているんだあ！確かに、バイクで走ればお寺から 2 ヶ

3分のところにホテルがあります。以前、日本から団体でシルプルに來られた方々が宿泊したホテルです。

なあゝんだ。あそここのホテルではガソリンスタンドを備えているんだ。流石ホテル！と思つて確認する為、指差してあつちのほうにあるホテルだよね？と聞くと、「いや違う」という。しかし、この村にホテルと言つたらあそこしか無い筈。

「ホテルつてどこにあるんだ？」

「すぐ近くにあるだろう、あんたの家のすぐ近くだ。」

それは知らなかった。そんな近くにホテルがあつたとは！

「教えてくれ！」

「行けばすぐわかる。食物を作つて売つてるところがあるだろう。そこだよ。」

「え！ 何処だよ？ その店の裏にホテルがあるのか？」

「あそこにあるではないか！ わからなければ連れて行つてやる。ついて来い」

というわけで一緒に行つたところは、何の事は無い、お寺の二軒隣の、以前コーラやりんごを買つた事のある、毎日見慣れているお店です。

えええ！ ここはホテルだったのかあ！ 奥がホテルになつてゐるんだなあ！ と勝手に思い込んで、ビックリ。ガソリンスタンドらしきものがない！ 「どこにガソリンがあるのか？」と彼に

聞けば、「あそこだ」と指差す。

な、なんと、なんと！ 村人が食事をしている、プラスチック製のテーブルと椅子が置いてある野外食堂の道路側に、それらと並んで古びた木製の縁台があり、その上に強い日差しに曝されながら1リットル入りのペットボトルが等間隔に5本並んでいて、薄茶色の液体が入っているのでした。

「え!? これ、ガソリン!?」

「そうだよ」

「だつてこれペットボトルだろ？ 大丈夫？」

「ノープロブレム。ノープロブレム。」

問題ない、と言う。ビックリしました。

こんな強い日差しの下、ガソリンがペットボトルで1リットルずつ小売りされているのでした。ペットボトルつてガソリンで溶けると思つていたのですが…？

気になりましたが、どうしても必要なので、とりあえず2リットル買うことにしました。

「あんた、空いているペットボトル持つてこい」

と言われ、お寺がすぐ近くなので、帰つて空のボトルを探している間、彼が、2本お寺まで持つてきてくれ、バイクのタンクに入れてくれたのでした。ペットボトルはお店に返却です。特別製のペットボトルではないはずですが、ボトルその

ものが貴重品なのかなあ？ と思つてます。彼に、

「このホテルは泊まれるのか？」

と聞くと、

「いや、泊まらない。」

「それじゃホテルではないだろう」

「いや、ここはホテルだ」と言う。

インドでは我々が言うところのホテルはホテルとは言わず、ゲストハウスと言うのであつて、ホテルとは私の理解したところによれば、インドではどうも「食堂」のことをホテルと言うらしいのです。このこと思い出したのは、中国に行った時、ホテルは「飯店」という表示だったのでした。



『龍族』では、皆様からの寄稿をお待ちしております。

佐々井秀嶺上人に対する思い、研究の成果など様々なテーマで広く受け付けております。

- ・原稿は事務局宛にメールまたは郵送でお送り下さい。
- ・使用したい写真等の素材がございましたら同封下さい。
- ・連絡の取れる電話番号やメールアドレスを忘れずにご明記下さい。
- ・掲載の可否および時期の判断につきましては、編集部にお任せ頂いております。
- ・原稿料等はお支払致しかねますので、予めご了承下さい。

第二次マンセル遺跡発掘の進捗状況に関するレポート

飯田寿一

経緯

マンセル遺跡は、1990年代に佐々井上人を会長とする龍樹菩薩記念研究協会が発掘を行いました。発掘主任のA・K・シャルマ氏の研究報告を不十分とする佐々井上人は、遺跡内部の調査を含めた再発掘を希望していました。しかし資金面や多忙を極める活動、また自らの体調悪化などにより計画を進めることができませんでした。

昨年6月、どういう経緯か定かではありませんがインド考古局より龍樹菩薩記念研究協会の佐々井上人宛てに、マンセル遺跡再発掘のインヴェイションが届きました。私飯田がちょうどナグプールを訪れた際にそのお話を聞き、また南天会の方にも相談して、2015—16年度に日本人支援者が中心となり発掘の準備を進めることになりました。

発掘体制

発掘チームは南天会の佐伯隆快さん、小林三旅さん、中村龍海さんを中心に、

インドに在住している飯田が協力し発掘申請書の準備をしました。発掘アドバイザーに、アンコールワットを発掘した地質学者の岩崎好規先生及び構造家の安田女子大学山田俊亮先生に協力をお願いをしました。

申請スケジュール

申請書類は5月にインド考古省から届き、8月末が締め切りとなります。また発掘許可審査は9月末—10月頭になり、結果は即日発表されます。

発掘方法

発掘はサイト3（南天鉄塔と推測される山の頂上）の下部を調査する為に、アンコールワットでも用いられたボーリング方式で下部の空洞の確認、及び崩れている洞窟の再掘削により山頂下部の調査をすることを検討しました。

許可申請の結果について、

その経緯

結論から報告すると、本年度の申請に関しては、残念ながら許可を取ることができませんでした。

第一次マンセル遺跡の発掘依頼をしたシャルマ氏を発掘主任とし、申請書は日本人のみで作成しました。初めての申請であり書類の多少不備もありましたが、後日修正できる内容でした。

9月下旬に佐々井上人と飯田は発掘許可審査を直訴する為に、インド考古省の最高責任者に直接説明をする機会がありました。その時は責任者は非常に好意的であり、非常に興味深い対応が良く許可取得に期待が持てました。

しかし委員の一部が、マンセル遺跡がヒンディー遺跡という持論を覆す可能性のある調査を認める事が出来ず、強硬に反対し、本年度の調査許可を認めませんでした。シャルマ氏からは、会議で特にボーリング方式が技術的に問題になったと報告を受けました。崩れている洞窟の再掘削に関しては、技術的には問題がないが発掘の必要性がない、との議論もあつたようです。

佐々井上人は、インド考古省の全体の同意がない場合R S Sによる妨害の可能性があるので、調査期間が短いボーリ

ング方式調査で、洞窟の存在を確認した後には発掘をする必要があるとの考えでした。従って、ボーリング調査ができない以上、許可申請に関する交渉は中止すべきとの判断でした。

来年度以降の方針

最大の問題は許可申請です。本年度の申請により手続き方法を理解する事が出来き、来年以降はよりスムーズに提出できると考えています。本来であれば、仏教徒の考古学者に依頼すべきですが、佐々井上人とシャルマ氏のこれまでの関係を考えれば、仏教徒単独での発掘は難しいと考えています。また佐々井上人が龍樹山の発掘も希望していますが、R S Sの妨害により発掘して出てきたものを隠す可能性があるので、現時点では時期早尚と考えています。来年度以降に関しては、ボーリング調査以外の方法で、なおかつインド考古省が納得する方法を検討して申請する事を考えています。

最後に本年度の皆様のご協力が大変ありがとうございました。残念ながら本年度の発掘は難しかったのですが、佐々井上人が第一次マンセル発掘時に許可を取った時は数年がかりで、なおかつ最終的には政治家も使って許可を取った事を思えば、これからも粘り強く交渉をしたいと考えています。

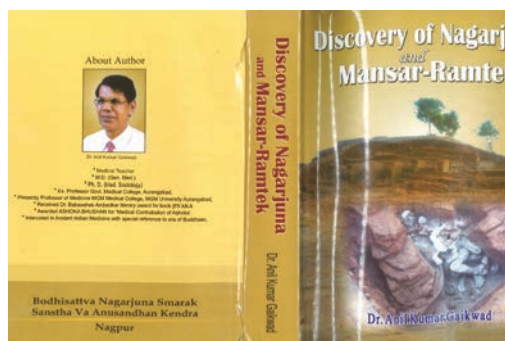


『龍樹の遺跡の発見』

—インド、マンセル・ラームテク遺跡— (仮題)

アニル・クマール・ガイクワード…著

中村晃朗 (龍海) …翻訳



※こちらは原書の装丁です。

の紹介とお願い

中村龍海

北東に約 40 キロメートルの地点に位置する、小山上にある複合仏教遺跡群)。かつて、佐々井秀嶺師率いる龍樹菩薩記念研究協会がインド人考古学者達と行った本格的な発掘以来、マンセル再発掘の機運が今最も高まっていると言えます。本書は現時点での、マンセル遺跡とその発掘、そして大乘仏教の開祖龍樹 (ナーガールジュナ) との関わりについての集大成に位置づけられる書籍になります。

第 1、2 章で龍樹菩薩にまつわる伝説・伝承の概観、第 3 章で大英帝国統治時代から現在までのマンセル遺跡踏査・発掘成果の総覧と問題点の指摘が行われます。第 4 章はマンセルから多数の薬草や古代インド医学 (アーユルヴェーダ) の薬・器具が見つかったことから、インド医学の歴史と龍樹の貢献とが概観されます。第 5 章は龍樹菩薩の著作とされる『宝行王正論 (ラトナーヴァリー)』からの抜粋。第 6 章はマンセル遺跡に関する近年の新聞記事の紹介です。

本書には龍樹菩薩とその遺跡について、あまりよく知られていない重要な知見が幾つもちりばめられています。例えば、マンセルからラームテクの方向へ向かうと龍樹山と呼ばれる場所

に、現在は失われた石の首があり、それが「ナーガールジュナ」という名称にまつわる伝承と結びついていたことが記録からわかります。1873—74 年に同地を訪れたイギリス人、J・D・ベグラに拠れば、

「下方、丘陵の側面では、岩の中の小さな裂け目が頂上からの短い道となっており、やがて壁を作って小房となる。此処にある二つの像は龍とアルジュナのものだと言われており、そこから「ナーガールジュナ」という名前が出ている。」※1

これまで「ナーガールジュナ」という名称については、「彼はアルジュナという名の木の下で生まれ、また龍と関わりがあったので『ナーガールジュナ』と呼ばれるのである」といった旨が鳩摩羅什の『龍樹菩薩伝』等で語られることが知られていましたが、考古学的な探查記録にこうした別の伝承が残っていることは全然知られていなかったため、非常に画期的な再発見であると言ってよいでしょう。ちなみにこの石の首については、R・B・ヒラーラール (1907) や、V・V・ミラシ (1958) 等、インド人考古学

者達の記録にも言及があり、佐々井秀嶺上人も渡印当初、実際にそれを見ているそうです。同像は不幸にもあるとき何者かによって破壊され、失われてしまったので、こうした記録の存在がより重要になって来ます。

マンセル発掘が実現した暁には、本書はマンセル遺跡やその発掘計画に関する基礎資料となる性質のもので、同遺跡は玄奘三蔵法師等の記録と現地の考古学的特徴の一致から、大乘仏教の開祖龍樹菩薩の遺跡である可能性が高まっており、NHK 等も興味を示して来ています。純粋な学術書として価値があると同時に、かつてのシュリーマンによるトロイ発掘の様なロマンもあり、また佐々井秀嶺師の活動の記録としても歴史的価値のあるものです。マンセル遺跡を専門的見地から本格的に日本で紹介する先駆けの一冊となるので、その資料的価値は唯一無二のものであると言えましょう。

同書については、来年中の出版を目指しておりますが、出版実現のみぎりには南天会会員の皆様に先行予約のご案内をさせていただく予定でおります。約 600 ページ (A5 版ソフトカバー) で定価 5000 円 (予定) のところ、著者割引の 4000 円 (予定) でご提供させていただきます。予約開始の際は、また改めてご案内さ

現在、マンセル遺跡 (再) 発掘プロジェクトが進行中です (マンセル遺跡—北緯 21 度 23 分、東経 79 度 16 分—は、インドマハラシュトラ州の州都ナグプールか

させていただきますので、よろしければご購読のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

プロフィール

□ アニル・クマール・ガイクワード

1969年に大学卒業以降、M.D. (Gen. Med.)、Ph.D. (医学、社会学)の学位を取得。インド政府アウランガバード医科大学元教授。アウランガバードMGM大学医科大学医学教授。『ジューヴァカ』の著述でババサーヒブ・アンベードカル博士文学賞を受賞。「アショーカーの医学への貢献」の論文で、アショーカー・ブーシヤン勲章を授かる。古代インド医学、殊に仏教時代のそれが興味を中心にエイズ、心臓病等の診療、助言等を行う。HIV感染患者のカウンセラーを養成し、自身も冠動脈や結合組織の病気等、慢性病治療の第一人者である。

(Dr. Anil Kumar Gaikwad Roy MD, MD, Ph.D.) ホームページより。

□ 中村晃朗 (龍海)

1985年 鹿児島県生まれ。

2012年 東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻インド文学・インド哲学・仏教学専門分野修士課程修了。

2016年 インド国立ナランダー大学歴史学部修士課程を第一期生として修了。

第8回世界考古学会議京都大会にて、「マンセル・龍樹の遺跡の発見…水流に係る建築および中国・朝鮮の旅行記にもとづいて」と題して発表。

※1 Beglar, J.D. Report of a Tour in Bundelkhand and Malwa, 1871-72 and Central Provinces, 1873-1874, Arch. Survey of India, Vol. VII, 1878, p. 113.



ご支援・ご入会について

◆ ナグプール滞在支援 ◆

南天会では、一定期間ナグプールに滞在して直接佐々井上人のお手伝いや健康管理ができる日本人スタッフの派遣を実施しております。

この度、第四次派遣隊が2ヶ月半の務めを終え無事帰還し、入れ替わりで第五次派遣隊がナグプール入りしており、滞在支援は幸い途切れることなく継続することができております。

このような積極的な支援が実現できますのも、南天会会員の皆様が佐々井上人に対する熱い思いを寄せて下さるお陰です。ご協力下さいました皆様お一人一人に感謝致します。今後も継続して支援を続けていきますよう、より一層のご協力を賜りたいと思います。何卒宜しくお願い致します。

・渡航費カンパのご協力 同封の振込用紙にて下記口座にお振込下さい。次なる要員を送り出し、支援を継続するためにご協力をお願い致します。

・滞在支援要員募集 日本食の調理など健康面の補助、また日本との連絡を密にすることが主な任務となります。滞在期間は1〜3ヶ月程度。南天会からは往復渡航費、保険、ビザ申請などの経費が援助されます。現地での滞在費用は自費となります。詳しくは南天会事務局までご連絡下さい。

◆ その他ご支援 (特別支援) ◆

時期、金額を問わず随時お受け致しております。

《南天会ご入会をご希望の場合》

振込用紙に「住所・氏名・連絡先電話番号(メールアドレス)」、通信欄に「会員種類(支援、一般、学生)」をご明記の上、会費を送金ください。会費納入後、確認書類を封書にてお送りいたします。

※領収証が必要な方は、通信欄にその由ご記入ください。

【会員種類と年会費】

支援会員 10,000円以上/年
一般会員 5,000円以上/年
学生会員 2,000円以上/年

(※大学生まで)

《各種お振込先》

【金融機関名】 ゆうちょ銀行

【加入者名】 南天会

【口座番号】 01380-0-90164

同封の振込用紙、または郵便局備え付けの払込取扱票にてお振込下さい。

※ご入会を希望せずご支援のみの方は、通信欄に「入会不要」とご記入下さい。

南天会会計報告 (H28. 8. 1～H28. 10. 31)

(単位 円)

月	日	摘要	収入金額	支出金額	差引残高
		前期繰越			1,289,873
8	2	缶バッジ制作費振込 ※1		35,532	1,254,341
8	2	振込手数料		216	1,254,125
8	28	交流会本売上	20,300		1,274,425
8	28	支援金 (現金)	50,000		1,324,425
8	28	「日本行脚」委託支払 (著者分)		30,000	1,294,425
8	28	6 月上人滞在費用清算 (交通費・昼食代・散髪代)		40,845	1,253,580
9	1	インドへ荷物発送 (2 箱)		13,100	1,240,480
9	18	第 5 次滞在支援隊援助 ※2		150,000	1,090,480
9	18	振込手数料		432	1,090,048
9	27	発掘プレゼン交通費援助 ※3		30,000	1,060,048
9	30	会費・支援金 (振込)	460,000		1,520,048
9	30	会費・支援金 (現金)	17,000		1,537,048
10	2	上人 6 月来日写真印刷代		16,644	1,520,404
10	12	佐々井上人へ支援金 ※4		1,000,000	520,404
10	17	支援金 (現金)	20,000		540,404
10	19	社会苦に挑む南アジアの仏教 30 冊購入		31,104	509,300
10	31	会費・支援金 (振込)	38,500		547,800

- ※1＝佐々井上人からの依頼で大菩提寺奪還闘争佐々井上人肖像画の缶バッジを 700 個作製しました。
- ※2＝第 5 次滞在支援隊は、第 4 次の位田樹音さんの後、亀井佑二さんが滞在中です。
- 滞在支援隊援助の内容は、日本～インド航空券、海外旅行保険料、ビザ申請代等の必要経費で、現地の滞
在費用は各自の出費となります。
- ※3＝マンセル遺跡発掘のためインド考古局におけるプレゼン出席の佐々井上人のナグプール～デリー往復交
通費です。
- ※4＝本年度南天会支援金として、龍樹菩薩大寺で佐々井上人に直接お渡ししました。

《 特別支援金寄付者御芳名 》※敬称略

飯高多美子 井上孝明 小池一郎 小寺信雄 坂田暢子 宍戸末美

武田英敬 土居奈生子 土岐信子 西阪真一 福瀬くに子 密門会有志

(年会費とは別に南天会に支援金をいただいた方のお名前です)

- ※ 崎本仁彦様より、「黄金曼荼羅」大小額と図禄豪華本が
佐々井上人に南天会を通じて贈呈されました。
- ※ 真成院様には、交流会会場を無償にてお貸しいただきました。
- ※ その他、世話人賛同人各会員の皆様から様々なご支援をいただいております。

◆南天会現況(平成二十八年十月三十日現在)

正式会員数 161名

賛同人(五十音順・敬称略)

岩佐澄隆(仏国土をつくろう会会長)

漆間宣隆(浄土宗浄土院住職・前岡山県佛教会会長)

奥平心月(釣月庵庵主)

織田隆深(高野山真言宗真成院住職・密門会会長)

黒澤雄太(剣士・日本武徳院師範)

小池一郎(株式会社マクシス・シンター常務取締役)

島影 透(株式会社サンガ社長)

高山龍智(佐々井上人お弟子)

土屋信裕(顕本法華宗弘通所法華行者の会主宰)

富士玄峰(臨済宗・元ナグプール同友会世話人)

宮淵泰存(日蓮宗妙光寺住職・長野県修法師会会長)

宮本光研(真言宗御室派元執行)

宮本龍勝(佐々井上人お弟子)

山本宗補(フォトジャーナリスト)

※賛同人について

当会の主旨を理解し、協力、推薦する人を賛同人とし、お名前を公表させて頂いております。

賛同頂ける方は是非お申し出ください。

※世話人について

南天会諸業務をお手伝いいただける方は皆世話人とし、特に任命等はいたしませんので、どなたでも気軽に参加ください。



メディア掲載・出演情報

NHKラジオ第2 9月4日

宗教の時間「インドの真ん中で仏教を生きる」

= 佐々井上人ご本人の肉声インタビューが放送されました。

週刊文春 10月20日号

インド仏教1億5千万人の頂点に立つ日本人僧侶、81歳の「菩薩道」

= 3ページに亘るグラビア記事で大きく取り上げられました。

交流会のお知らせ

□名古屋交流会のお知らせ

南天会の交流会を名古屋で開催いたします。

古くより佐々井上人を支援し続けておられる南天会賛同人の小池一郎氏にお話しいただきます。

またマンセル遺跡発掘申請、改宗記念式典参加報告、佐々井秀嶺資料室報告なども行います。

交流会の後、会場のインド料理店で食事会も予定しております。未入会の方も歓迎です。是非ご参加ください。

日時: 12月17日(土) 14:30~

場所: 南インド家庭料理 カルナータカー 2階

愛知県名古屋市名東区豊が丘(ゆたかがおか) 1809

TEL 090-1863-1135

名古屋市営バスご利用は本郷駅乗車

明德池東バス停下車 徒歩2分弱

or 市営地下鉄 藤が丘駅 下車 徒歩13分

http://masaladosa.jp/

会費: 交流会参加は無料 食事会は3000円程度

お申込み: 小池一郎(090-3936-4303)

(南天会事務局)

〒710-0004

岡山県倉敷市西坂 1582-1 一心念誦堂内

TEL/FAX 086-463-9391

佐伯隆快(090-5304-8955)

小林三旅(090-4538-2677)

メール nantenkai@gmail.com

URL http://www.nantenkai.org/

最新情報は
Facebook『佐々井秀嶺資料室』
をご確認ください。



南天会のご周知・ご吹聴にご協力ください

お陰様で入会者数は増えてきておりますが、支援の輪はまだまだ広げていかなければなりません。パンフレットなど必要な方は事務局までお知らせ下さい。PDF版は南天会ホームページ「南天会について」よりダウンロードできますので、各自印刷の上ご利用下さい。